

朝河貫一と

『入来文書』と入来院貞子



梶原 宣俊

はじめに

二〇一七年（平成二十九）二月、四年間続けてきた「着物で出水武家屋敷を歩こう会」が「第七回地域再生大賞優秀賞」（共同通信社主催）を受賞し、その報告に渋谷俊彦市長を訪ねたときであった。

渋谷市長が、一冊の分厚い本を持ってこられた。それが、朝河貫一著、矢吹晋訳『入来文書』（二〇〇五、柏書房、七二〇ページ）であった。私は、その名前くらいは知っていたが、初めて目にするこの大著に驚いた。渋谷

市長は、渋谷一族の歴史と入来院について熱く語られた。私が強い関心を示すと、どうぞお貸ししますから読んでみてくださいと言われた。私は、遠慮なく借用することにした。しかし、この大著は、私にとって難しく苦勞していた。そんなとき、私は入来院貞子さんという名前を思い出した。

私は、十年前に、妻の故郷である出水に住み、喜多流の謡曲をやっていたので、鹿児島謡曲連合会に入会し、中西喜彦会長にお会いした。その中西さんから『炉ばたセイ談』という個性的な雑誌をいただき、読んでいた。そこで、入来院重朝、貞子夫妻のことを知っていた。この雑誌は、小冊子ながら大変な中身の濃いものであった。入来院貞子さんは、一九九四年に東京から夫の故郷入来町に住み、地域おこしグループ「入来花木水会」の代表として七年間、入来薪能を主催してこられた

方である。私は一度お目にかかりたいと思いつながら、ついにそのチャンスがなかった。二〇一一年(平成二十二年)に永眠されたと聴き、慙愧に堪えなかった。

今年の二月下旬、私はようやく入来麓に行き、入来院重朝氏にお会いした。貞子さんの位牌に手を合わせさせていただき、少し話をさせていただいた。『炬ばたセイ談』の話も出て、帰りに『貞子の語る入来文書』をいただいた。この本は、私にも読みやすく、『入来文書』の入門書として出色のものだと思われた。そこで、この本を中心に、朝河貫一と『入来文書』と入来院貞子について私の思いを書いてみたい。

一、朝河貫一の生涯

朝河貫一は、偉大な人物であるが、その地味な中世封建史の専門家ゆえに日本では必ずしも有名ではない。私も全く知らなかった。

朝河は、一八七三年(明治六)、福島県二本松市で二本松藩士の子どもとして出生、小中高と秀才の誉れ高く、一八八八年(明治二十一年)、福島県尋常中学校(現福島県立安積高校)に入学し、英国人教師トーマス・エドワード・ハリファックスに英語を学び得意科目であった。一八九二年(明治二十五年)東京専門学校(現早稲田大学)に入学し、首席で卒業。在学中に、大西 祝、坪内逍遙、夏目漱石等の教えを受けている。この時、横井時雄により洗礼を受けている。一八九五年(明治二十八年)大隈重信、徳富蘇峰、勝海舟らの援助を受けて、米国ダートマス大学に留学、一九〇二年(明治三十五年)イエール大学大学院を卒業、博士号取得、ダートマス大学の講師となる。一九〇六年(明治三十九)米国議会図書館、イエール大学図書館から依頼され、日本関係図書収集のため一時帰国(第二回)。一九一七



朝河貫一（1940年撮影）

年（大正六）東京大学史料編纂所に調査研究のため二回目の帰国、このとき、入来文書との運命的な出会いを果たすことになる。一九一八年（大正八）朝河は入来村を訪れ、八日間滞在した。旅館から役場に連日通いつめ、「入来院家文書」や「清色亀鑑」など十数巻の古文書や系図類を調査し、次々と筆写していった。一九二九年（昭和四）、その成果が、イエール大学とオックスフォード大学から英

文版「THE DOCUMENTS OF IRIKI」として刊行された。朝河は、一九三七年（昭和十二）日本人初のイエール大学教授となり、一九四八年（昭和二十三）バーモント州ウエストワーズボロで永眠した。七五歳であった。

私が驚いたのは、日欧の中世封建制の比較研究への情熱と功績はもちろんのことだが、それ以外に、明治大正昭和の激動の時代を見据え、平和の提唱者として積極的に行動していた事実である。一九〇九年（明治四十二）『日本の禍機』を著わし、日露戦争後の国民の興奮に警鐘を鳴らし、このままいけばやがて日米開戦になることを予測し、敗北すると警告している。そして、一九四一年（昭和十六）には、日米開戦の回避のために、ラングドン・ウオーナーの協力を得て、ルーズベルト大統領から昭和天皇宛ての親書を送るよう

に働きかけを行っている。さらに、敗戦後は、天皇と共存した民主主義国家の構想を描いていた。

朝河は、優れた歴史学者であるとともに、当時の世界情勢を的確に分析、洞察していた国際政治学者でもあり、平和の提唱者でもあったのだ。(この件に関しては、BS朝日テレビが、二〇一〇年四月四日「歴史ドキュメンタリー」で「海を渡ったサムライ―朝河貫一、日本に警鐘を鳴らした真の国際人」として一時間五五分の番組を放映している。また二〇一六年には、金高健二監督によるドキュメンタリー映画「ウオーナーの謎のリスト」が京都国際映画祭で上映されている。ウオーナーは、朝河と戦争回避の行動を行うとともに日本の文化財一五一か所の保護リストを作成し守った恩人である)

私は、昭和二十一年の生まれで、学生時代

から、生まれる一年前まであったあの悲惨な戦争の歴史が気になり、戦争の歴史と体験について考え学んできたから、朝河の論文と行動が大変気になったが、これについては、また別の機会に書いてみたい。

二、朝河貫一著 矢吹 晋訳『入来文書』

さて、朝河貫一の『入来文書』(二〇〇五、柏書房)は七二〇ページに及ぶ大著であり、緻密で極めて専門的な本である。私にはとても手の負えない内容である。そこで、入来院貞子の『貞子の語る入来文書』(二〇一二高城書房)を参考にしながら書いてみたい

『入来文書』は、日英文の序文に続き、序説で南九州、嶋津家、渋谷家、入来院の地名と固有名詞について述べている。次に文書の解題・注釈が一五五項目にわたって書かれている。そして、論点の要約が、起源・発展・諸関係・体制としてまとめられている。最後

に、ヨーロッパの学者3人の書評と訳者矢吹晋の詳しい解説が書かれている。矢吹は、最後に五〇頁にわたる訳者解説を書いている。

朝河は「序説」で、南九州が南の海とアジア大陸に近く、つねに外国の影響を感じながら、地方独立の雰囲気を育ててきた重要な地域であることを強調している。大陸文化と仏教の導入、仏教と神道の混交、朝鮮・中国との政治通商関係、私的な武士の象徴、自律的な封建国家の発展、南ヨーロッパのローマカトリック国家との接触等が、封建制日本を打倒し、新体制を樹立する明治維新を可能にしたと述べている。南九州は、薩摩・大隅・日向の三国からなり、皇室発生の地であり、熊襲という凶暴な種族の居住地であり、封建時代の日本でおそらく最大の領地を最も長期に一つの大名が保有した、全時代を通じて特別に重要な地域であると強調している。そして、

「入来」はこの地域で長く変化に富む経歴のなかで際立った役割を果たしたと強調している。

島津庄は、十一世紀初期に生れ、一一八六年から実質的な封建体制が始まった。鎌倉幕府を創設した源頼朝によって、日向・大隅・薩摩三国の守護となったのが島津家の祖先である島津忠久である。忠久は、ここ出水、木牟礼にも滞在したという。現在、木牟礼城跡はわずかな痕跡を残すだけで、国道三号線の側にひっそりとたたずんでいる。

一二四七年、鎌倉から渋谷兄弟が支配者として赴任し、ここから入来院氏の歴史が始まる。朝河は、渋谷氏のルーツ桓武天皇から渋谷重国までの系図を載せている。渋谷氏は川崎から出て、武蔵の渋谷と相模の渋谷に分かれ、相模の渋谷氏が薩摩に下向することになる。一二二一年の承久の変で源氏が三代で断

絶し、北条氏は鎌倉幕府成立に功績のあつた豪族（梶原・比企・畠山・和田・三浦）を滅ぼし、独占的支配を確立していた。渋谷光重は北条方として功績をあげ、甕島を除く薩摩の川内・東郷・祁答院・鶴田・入来院・高城の地頭職となる。一二四八年、光重は、長男のみを関東に残し、次男以下五人の兄弟を薩摩に送り出した。五兄弟は、渋谷党と呼ばれ、次男実重が東郷、三男重保が祁答院、四男重諸が鶴田、五男定心が入来院、六男重貞が高城を支配した。

こうして、各自は地域の名前を姓として名乗り、先住の豪族（大前・大蔵・宮里等）を傘下に治めていく。この「渋谷五族の消長」については、入来院貞子が、『千台』（薩摩川内市郷土研究会誌三十六号）で詳しく書いている。

しかし、この渋谷五族も、やがて島津氏と

の抗争の過程で統合されていく。

その過程で、もつとも強力で最後まで抵抗したのが入来院であった。朝河によれば、入来院が島津の真の家臣となったのは一五七四年であると書いている。

かくして『入來文書』は、六百年に及ぶ日本中世封建時代の貴重な資料として、朝河によつて世界へ発信され、私たちも読むことができるが、私の能力ではここまでが限界である。

私は、鹿児島に来てから、各地の古風な難しい地名や氏名に驚いていたが、その理由をかい間見ることができ、鹿児島島の歴史を明治維新だけではなく、中世まで遡ることによつて、多少理解することができた。

さらに私が驚いたのは、朝河貫一が明治以後の日本の近代化のなかで、米国に在住し、日本とヨーロッパの中世封建制度の比較研究

に没頭し、欧米で高く評価されていることである。日本では評価されずに、欧米で評価されて初めて日本で有名になったという例は多いが、朝河はなぜ日本で有名にならなかったのだろうか。

「入来文書」が英文の大著で、高度な専門性を有していたからだろうか。

矢吹は、最後の訳者解説で、この大著・朝河史学が学界においてなぜ黙殺されてきたかについて、日本中世史学界の視野狭窄を指摘している。私も、多少大学教育に携わり研究者の世界を垣間見た経験があるので、よく理解できる。朝河は、緻密な研究者であると同時に、世界的な視野と行動力を有した稀有な学者であったことは、前述した戦争との関わりを見れば一目瞭然である。いわば、虫瞰図と鳥瞰図をともに有しているのである。

矢吹もまた、中国経済・中国現代論が専門

で多くの著書がありながら、朝河貫一を研究し、さらに、『敗戦・沖繩・天皇』や『尖閣衝突は沖繩返還に始まる―日米中三角関係の頂点としての尖閣』等で、現代的問題にまで切り込んでいる。朝河と同様、虫瞰図と鳥瞰図をともに有している研究者に思える。

ここで、矢吹と朝河との運命的な出会いについて、訳者あとがきから要約しておこう。

矢吹は、一九五四年に福島県立安積高校に入学した七〇期生で、朝河（四期生）の後輩なのである。矢吹は、一九五〇年代に、同じ高校の先輩安部善雄『最後の日本人』著者一九八三の「辞書食い」（英和辞書を、毎日二ページづつ暗記し、食べるか破り捨てていったというエピソード）の話を聴き、朝河伝説の中で育ったと述懐している。一九九〇年、「朝河貫一研究会」が発足し、二〇〇四年には「朝河貫一顕彰協会」が旗あげし、安部急逝に伴

い、中心的存在になつていく。かくして、『入

来文書』の邦訳にたどりつく。その後、矢吹は『朝河貫一とその時代』(二〇〇七)、『日本の発見―朝河貫一と歴史学』(二〇〇八年)ともに「花伝社」を出版している。また、余談ながら、矢吹は二〇一〇年夏に出水の麓武家屋敷を訪問し、ガイドが朝河貫一や「入来文書」、薩摩示現流が入来院一族の東郷家に始まることも知らなかったことに落胆している。さらに、鹿児島市の尚古集成館の島津家系図が、島津忠久が源頼朝の子であるかのように展示されていることに疑問を投げかけている。朝河も矢吹も「島津忠久の生い立ちをめぐる」で疑問を呈しているのである。矢吹は第七四回朝河貫一研究会で、そのことについて詳しく論じている。そこには、入来院貞子も参加していた。かくして、入来院貞子もまた、朝河や矢吹、入来文書との出会いにより、入来

で輝かしい実績を残している。

三、入来院貞子の生涯

入来院貞子は、昭和八年長野県諏訪郡上諏訪町に生れ、昭和三十一年、入来院重朝氏と学生結婚、早稲田大学卒業後、富士電機会社に勤務し、平成六年、夫の故郷入来町に移住し、精力的に様々な活動を継続してこられた。まず、入来町の地域おこしグループ「入来花木会」の代表として七回にわたって「入来薪能」を主催してこられた。その歩みについては、「炉ばたセイ談」平成二十六年秋号にパンフレット表紙とともに演目が記載されている。また、ネットで、第六回、七回の薪能の様子や入来院貞子さんの挨拶を見ることができきる。

前述したように、私もまた五十代に喜多流能楽師大島政允氏(広島県福山市)に出会い、能謡曲を学んできた。特に薪能が好きで数多



入来院貞子

く鑑賞し、地謡を務めたこともある。出水に住んでからは、麓武家屋敷で、いつか薪能をやりたいと夢見てきた。鹿児島は在住の能楽師が不在で、江戸時代は盛んであったらしいが、現在は能を鑑賞する機会は極めてまれである。そのような中で、入来で薪能が七回も上演されたことは驚きである。薪能の上演は経費も高く、実現には相当の苦労があったと思う。私も一度見に行きたいと思いつつにチャンスがなかったのが残念である。

入来院貞子はさらに、朝河貫一研究会理事として活躍し、夫君や矢吹晋氏とともに米国のイェール大学やダートマス大学を訪問しておられる。矢吹晋の講演会もたびたび企画され、鹿児島市日中友好協会常任理事としても積極的に活動してこられたという。さらに、そのような実践活動だけでなく、文芸誌「火の鳥」「ゆうすげ」歌誌「にしき江」同人として数多くの作品を発表しておられる。「炉ばたセイ談」平成二十三年秋号には、その作品リストが掲載されている。それによれば、現代小説・論評が十作品、歴史小説・歴史論説が七作品、エッセイが一四八編、研究論文が五編、寄稿文が二編、自伝が一編、短歌が一六四首も存在している。そして著作が二冊ある。その類まれなる才能と行動力には驚かされる。まさに「スーパーばあちゃん」である。

「運命の星」（「炉ばたセイ談」平成二十二

年夏号)では、青春時代の社会運動での出会いや別れ、重朝氏との学生結婚、子育ての様子が生き生きと描かれている。そして、最後は次のように締めくくられている。「夫の観る四柱推命によれば、私は自刑という星があつて、自我が強く猪突するが、一方珍しい貴人星が二つもあり、その欠点をカバーし護つてくれていたという。私は素直に信じている。運命に感謝し、夫に感謝し、祖霊に感謝するばかりである。加えて、この過疎の祖霊の地を文化の里として輝かせることが出来たら、もう言うことは何もない」

かくして、入来院貞子は二〇一一年(平成二十三年)五月二日、不慮の事故で永眠された。七十八歳であった。

終わりに

朝河貫一、矢吹晋、入来院文書、入来院貞子という偉大な存在との出会いは私にとって青

天の霹靂ともいうべきものである。

特に入来院貞子は、身近な地域の存在として大変衝撃を受けた。同時に、その功績には足元にも及ばないが、何かしら共通性を感じ、親近感を覚えた。

私は、貞子さんより十三年遅れて昭和二十一年六月、福岡県で生れ、熊本大学で学び、学生時代は学生運動やセツルメントという地域活動に熱中し、現在の妻と出会い、卒業後に結婚した。また、太宰治や吉本隆明に出会い没頭した。仕事は広島、福山、福岡のYMCAという国際団体で働いてきたが、十年前に定年退職後、妻の故郷である出水に居を定め、様々な地域活動に尽力してきた。

鹿児島・出水の歴史に関心を持ち「いずみ郷土研究会」に入会し、野田にある俊寛の逃亡伝説や、甕島の梶原一族等を調べ投稿してきた。また、鹿児島まちの駅や出水の戦争遺

跡、平和ガイド、着物で武家屋敷を歩こう会等を体験し、出水の活性化のために、自分なりに一生懸命やってきたつもりであった。

しかし、入来院貞子さんに比べれば、まだまだ力不足、努力不足であったと痛感した。これをご縁に、「炬ばたセイ談」の皆さまと交流させていただければと願っている。

(癒しと学びと語らいの里・ハーブガーデン
花びあ(民宿・カフェ)代表、個人と地域のキャリア開発を支援する国際キャリア研究所所長)

参考文献

・『入来文書』朝河貫一(柏書房 二〇〇五)

・『貞子の語る入来文書』入来院貞子(高城書房 二〇二二)

・『正・政・清・聖・性・醒 炬ばたセイ

談』(二〇二〇～二〇二六)



入来の代表的景観である庶流入来院家の茅葺門
(2003年12月撮影)